

---

# 喜劇的な小説家

オギマサカズ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喜劇的な小説家

### 【Nコード】

N2139W

### 【作者名】

オギマサカズ

### 【あらすじ】

ある作家に、原稿をもらいに行くと、どうでもよい話をきかされる。そんなはなしです。

ブランド物のスーツを着こんだ男が、タクシーを停めた。空気は乾いていた。男は、運転手に目的地を告げ、深く体をのけぞらせた。カバンの中から、リップクリームを取り出しパキパキに乾いた唇に塗りつけた。タクシーは徐々にスピードを上げ、一回目のメーター表示の変更が行われた。

男は、これから、ある小説家の所へ行き、原稿をもらわなくてはいけない。このインターネット全盛の時代に、出版社から小説家の家へ出向くことは、珍しいことなのだが。

小説家は、三年前にある出版社の新人賞を取ったうさぐさい男だった。その新人賞は、内容そのものよりも、作者のキャラクターや何よりを売れることを重視するので、業界の評判は悪かった。例えば、この小説家の受賞作は『トマトソースを創る時のように』というナメたタイトルで。内容も男女のなれそめや日常生活を、イタリアレストランのような文体で書かれたものなのだ。疲れはてて、カスカスのOL たちには、これくらい軽いものでないと、読書自体が体に受け付けないらしい。男の出版社の戦略も、若い女性にしぼっていて、編集長はいつも『文学はファッションだ』と言っている。男は、次々と刊行されるハードカバーのデザインに圧倒されるのだった。文学の内容は薄く、軽く、おしゃれで、大きな文字で書かれたものに变化してしていく。もはや新刊本の主役は、表紙のデザインとマーケティングへ移っている。

そもそも編集長が、担当の男に、小説家の家へ行けと言いだしたのには、理由があった。30才を過ぎて、新人賞を取った小説家は、業界でも有名な遅筆家だ。元々、文章を書く習慣がないだけに、彼自身はかなり苦労しているようだった。ただしそれは、原稿を定期的にもらいに行くことで、以前より随分とましになったのだ。その

小説家は、今は、昔の仕事をやめ執筆活動のみで暮らしている。でも男は小説家が、将来もこれで生活できるとは思わなかった。彼が表紙のデザインをやるわけじゃないんだから。

タクシーが停まり、男が料金を払うと、鉄骨で建てられた2DKの集合マンションを登っていく。

206号室のインターホンが鳴ると、小説家の男がマイクごしに出た。

『新町出版の小堺です。打ち合わせに来ました。』

『いやいやだが言った。しばらくして、ゆつくりドアが開くとスウエットにジーンズ姿の30代、凡人がそこにいた。小説家は、

『「苦労さん。」』

といい男を部屋の中へ入れた。

『どうなん、小堺くん、調子は？』

『いやーまあまあですね、先生は？仕事進んでますか？』

と男が聞く。すると、小説家は、先生と言われたことに有頂天になりながら、饒舌にしゃべり始めた。

『いやーダメダメやねあかんは！俺みたいに、世の中に何もいなかったってことを表現したい作家には、中々、他の人みたいに、スラストラとは、書けませんわ！』

担当の男は、くそみたいな小説しか書いてないくせにと思いながら、

『そうですね。先生のそういう部分を読者は期待してますので。』とおべっかを使った。

『そうやねんなあ。俺みたいに、否定の作家は大変なのよ。表現したくないってことを表現するみたいない！つまり、愛とか憎しみを表現するんとちゃうねんから。』

とカツコをつけて言った。まったく理屈っぽい男だと思いながら、

『そついや、友達の女の子に久しぶりに会ったら、先生のファンだつて言っていましたよ。』

と彼を持ち上げる嘘をついた。小説家は、子供のようなのを押し殺して、その男に、

『え、まじで、ほんまかいや。めっちゃうれしい。』

と言った。男は、何度もお世辞を言うこと飽きてきたので、仕事の話をはじめた。小説家の仕事は、ちっとも進んでなかった。担当の男は、少し怒った声で、でも丁寧には、

『先生、僕と先生は一心同体なんですよ。先生が、原稿をあげてくれないと僕は、クビだし、先生は信頼を失うんですよ。』と

小説家は低くため息をつき、スランプなんだよ、スランプなんだよと繰り返した。

『そんな、何本もすらすら書けるもんやないねん。一日中、4畳半の部屋で文学と向かいあつとると、そら、メランコリックになんぞうですわ。もつとリラックスして書かれたほうがいいですよ。』

先生は文学に対して思い詰め過ぎてますよ。小説家の中には、そうやって破滅的な生き方をする人も多いんですから。』

『あー確かに太宰治、川端康成、芥川龍之介、ヘミングウェイ、あとノイローゼで発狂した人も入れれば、きりがあらへん。これは、職業病やからなあ。』

『でもまあ、小説家は人間と向き合うのが仕事ですからねえ。』

と担当の男は、小説家のリハビリテーションも仕事のうちなんだよなあと考えつつ、まだ長くなりそうな話をしている小説家の声に耳を傾けた。彼は少し酔っているようだった。

『俺、もうやめようかと思ってるねん。書きたい小説をかいとるわけやないし。今の俺は、小説家として、ただいばりたいために小説を書いとる。これは小説に対する裏切りや。ちやほやされたくて政治家になって、世界の舞台で、肩身が狭く、名誉ある地位を占めたという理由だけで、戦争に参加する。そんな奴らと似たりよつたりや。』

『いや先生。それとはまったく別の話ですよ戦争とは関係がないで

しよ。市場経済、競争社会ですから。多少の妥協や、読者が望むものを書くのは、生活の為にしようがないでしょう。』

『あー生活なんて、くそや。少なくとも昔はそう考えてたんや。家族や生活を守るなんておろかや。俺は、そういう大変小さい世界で生きとつて、戦争になると家族が殺されるとしか考え人々を見下しとつたのに。なあ自分、戦争中に家族が目の前で他人に殺されても、国家の意思で動く他は、100%善人やん。でも、（目の前で家族が殺されても何もしないのか）ということを経由に、戦争をおこす人は自分の意思で、相手国の家族を殺すので100%狂人や。わかるか？』

『いやいや、先生、書きたい小説が書けないのとは別問題でしょ。』

『いや、こういう家族の為とか生活の為とかいっていると、脳が腐ってぼけてくるんや。見てろよ。アメリカを殺される前に、殺しに来る人を殺そうとする場合、どんどん怨まれるから、しまいには、殺し続けるはめになる。最後は、同じように考える人に殺されるか。法律的決定によって、世界中から狂人として処分されるわ！』

『じゃーがんばって納得のいく、しかも売れる小説書いてくださいよ。』

『だから、それが才能ないから、無理やっていってんねん。』

『逆切れしないでくださいよ。今、先生の本は売れているんですよ。ご存じの通りうちの出版社は絶好調ですから。マーケティングがうまくいってるんでね。おかげで営業力もついてきたし。世の中、弱肉強食ですから、最後は、資本金、営業力が左右しますよ。』

『あーうんこみたいな論理や。世の中が弱肉強食なんて誰がいったんや。あ、君はダーウィンの進化論を読んだんか。読んでへんやろ。何一つ生物学を知らんし、どこの生まれかも知らへんやろ。適当なことを言って人をだましやがって。』

『まあ、一般論ですよ。あれ、先生アルコール飲んでるんですか』  
『あーでも、意識ははっきりしているよ。俺は意見を言うので。戦争をしようと呼ぶ人に進化論をあげる奴がある。俺はその人に『君はうんこだ。』と言う。弱いものが死に、強いものが生き残ることは、アリンコが生きて、人間が生きていることの間かなる証明にもならへん。あーあの人は、自分が生き残る強い人間だと信じて疑わへん。』

『多くの人は、北朝鮮や中国が攻めてくるというが、侵略して資源のない日本から何をとりというんか。凡人の考えることは、狂気に満ちてるわ。電化製品でも奪われるのかしらん。非常に非現実的や。丸腰の日本を攻めたら、国連軍がすぐにつぶすやろう。世界中に日本中の金をばらまけばいい。日本は相手に戦争の口実を一つも与えてはいけへんのや。』

『いやあ、戦争に関しては僕も似た意見ですよ。憲法に戦力は保持しないと記してる国が、世界で5番目の軍隊を持っている。しかも戦闘地域に出かけていっている。国内法も守れない国に、国際法を守るのか。法律によって動いていない軍隊は、それ自体が、軍と一部の政治家の暴走ともいえる。世界に日本を攻める百の口実を与えている。ねえ先生、僕は先生の敵じゃない。先生は今からゆっくり寝て、明日から、また小説を書けばいい。先生は人間と向き合っで、小さな話を書けばいいんですから。それが小説でしょう。後、3週間もあるんですから。うまく行きますよ。』

『あー確かに、そうや。あー今日はゆっくり眠れそうや。アルコールなしで』

『先生、最近忙しすぎじゃないですか。連載も多いですし。ちょっと休まれたほうがいいんですよ。では、僕は帰りますので。』

男は、部屋を出ると、もうあの作家は駄目かもしれないと思った。編集長に言っておかないといけない。もう本は出ないかもしれない。彼は、あまりにも正常に人間と向きあつた為、すべてのバランスを崩している。あー代わりの作家を探さなくては、薄っぺらで軽い、おしゃれな作家を。知的で男前で、白ワイン仕立ての文体の男を用意しよう。

2週間後、出版社に訃報が入った。あの小説家が、やはり新築の2DKのマンションで自殺したそうだ。まだ青白い畳の上で、火縄銃の銃口を口につっこんで、自殺したらしい。4畳半の部屋は、血に染まって足の踏み場がなかったに違いない。担当の男は、火縄銃で自殺するとは、まるつきり考えてなかった。何も死ぬことはないのと思った。かなり、肉体的にも、精神的にも追いつめられていたのだろうか。あまりに、逃げ場のない死に方だ。

正面のデスクでは、編集長が、

『さあー忙しくなるぞ。』

と自身に言い聞かせている。彼の本はこれから増刷されるだろう。

『トマトソースを創る時のように』は、本屋の一等席でどのように映えるだろう。担当の男の目には、彼はもう、『喜劇的な小説家』にしか写らない。

05年 1月31日 書く

(後書き)

改行のしかたが分からず、読みにくかったとおもいます。すいませ  
ん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2139w/>

---

喜劇的な小説家

2011年10月9日14時44分発行